

ひとまち

## 地域で守る伝統

400年を越える歴史を持つ、石原のささら獅子舞。伝統の祭りを地域で継承するため、幅広い世代がひとつにまとまります。



2年に一度の本祭で、獅子舞は高沢橋を渡ります。そのときに舞う「昇殿の一つ打ち」は、3歩進んで2歩下がる独特の舞。この祭り一番の見どころです。

石原のささら獅子舞(県指定無形民俗文化財)は、毎年4月の第3土・日曜日に行われます。始まりは慶長12年(1607)といわれ、寛永11年(1634)に若狭小浜へ転封となった川越城主酒井忠勝が、雌雄2頭の獅子頭を携えたことで一時中断します。宝永6年(1709)、旧高沢町の井上家から獅子頭が奉納されたことにより復活し現在に伝えられています。

勇壮な舞を演じるのは、先獅子・中獅子・後獅子の3頭と少年が演じる山の神。さらに、花笠をかぶり、ささらを鳴らす4人のササラッコが四方に立ちます。笛と竹製のささらの音に合わせた舞には、12の場面があります。



先輩の舞を真剣に見つめ、動きを覚える比嘉さん(写真右)。

夜の公民館に、小学生から70歳代くらいまでの、さまざまな人たちが集まっています。その中に、今年初めて舞う比嘉隆太さん(23歳)の姿がありました。学生さんのときは写真部に所属し、卒業後も市内で祭りがあると撮影に出かけていました。そんなとき、舞ってみないかと声をかけられ、見る側から見られる側に、「伝統を担っている重みを感じています。稽古は厳しいですが、そのための時間や場所を作ってもらえることに感謝しています」と話してくれました。

初めて獅子を舞う人のことを「親」と呼び、祭りの始まりと千秋楽で舞う大事な役割があります。今年、新人が3人。3頭とも「親」が舞うのは、担い手が少ない昨今では珍しいことだそうです。

2年前に「親」を経験した岸直子さん(41歳)は、家族や親戚などが祭りに関わっていたこともあり、やって見ようと相談。「皆さん、すんなり受け入れてくれました。女性だからと特別な扱いを受けることもありません。ササラッコのお母さん方や興味を持った女性の方もぜひ参加してほしいですね」と話します。「親」を指導していた齊藤有紀さん(中

学3年生)の初舞台は小学1年生のときの山の神。踊りは難しいけれど、楽しかったという齊藤さん。早く獅子舞を舞いたくて、自作の「ダンボール獅子」で練習した成果もあり、小学5年生で獅子舞を舞うという早さ。父親で獅子舞の経験者である齊藤浩一さん(51歳)は「伝統芸能を親子で伝承できるのも、地域の祭りのいいところ」と笑顔で話してくれました。

石原のささら獅子舞保存会会長・猪鼻哲雄さん(68歳)は、「仕事を終え、稽古に来るのは大変だと思う。参加しやすい環境を作ることと私たちの役目」と話します。そのため、これまでは主に祭りの前だけだった稽古を一年を通じて行い、個人の都合に合わせてられるようにしたそうです。「祭りは、しきたりの伝承だけではなく、人との接し方を学ぶ、しつけの場であったり、地域のつながりを深める場でもあるんです」と猪鼻さん。伝統が世代をつなぎ、つながれた世代がさらに伝統をつないでいきます。



「親」の指導に当る岸さん(写真左から3人目)と齊藤有紀さん(写真右から2人目)。

# タイを体験

4月8日、タイの旧正月、ソンクラーン(水かけ祭り)を体験する催しが伊勢原公民館で行われました。「最近、容赦ない水かけ合戦として知られていますが、“微笑みの国タイ”を感じてもらえるよう伝統的な祭りを再現しました」と主催した埼玉在住タイ人クラブの中島スパタラーさん(45歳・笠幡)。



年長者の両手に、尊敬の意を込めて静かに水を注ぎます。



お祝いに駆けつけたタイ王国大使館一等書記官・パクウィーパー・アーウィパンさんは「川越とタイの文化交流が今後も続いていくとうれしいですね」と話してくれました。会場では、民族舞踊や音楽で盛り上がり、子どもの民族衣装コンテストに参加した須藤愛さん(小学2年生・南台2丁目)は、「きれいな服を着られてうれしい」とご機嫌でした。

# ハンガリーに響く川越の歌声

川越少年少女合唱団の小学5年生から高校3年生までの45人が、3月27日から4月3日まで、歌を通じて交流を深めるためハンガリーを訪れました。



参加した遠藤唯萌さん(小学6年生)は、相手の合唱団の透き通るような

歌声や大聖堂での音の響きに感動したと話してくれました。団長の熊谷高三さん(79歳)は「高いレベルの合唱を直接聴き、良い影響を受けたようです。普段よりも素晴らしい合唱を披露することができました」と満足そう。また、持参したハッピーを着て歌った「わっしょい、わっしょい」の掛け声に現地の人は興味津々だったとか。同合唱団は、8月の90周年記念事業コンサートに向け、練習に励んでいます。



行って 会って 体験  
気になるイベントや人を紹介

# 小江戸あるき



毎月第2土曜日は、市場で

4月14日、「食の宝庫」埼玉川越総合地方卸売市場に、新鮮な地場野菜や旬の食材のおいしい食べ方、バランスよく食べるための知識など、健全な食生活に役立つ情報を発信する食育ショップがオープンしました。同ショップは「豊かな食文化の形成と地域社会への貢献をしたい」という共通の思いから、女子栄養大学(坂戸市)と同市場が連携して開設。同大学副学長・五明紀春さんは「食は命につながる大切なものです。大学が持つ食に関する知識を生かし、皆さんの食育の役に立てれば」と話してくれました。

# 市場発 食生活に役立つ情報

調達した食材を使ったレシピの配布や試食会、ミニ料理教室が開催されます。市場内の空き店舗を改装した40㎡ほどの店内には業務用キッチンがあり、調理の様子を見学できます。今後は肉や魚などを扱う業者が考案した「川越市場井」などを販売する計画もあり、同ショップの多目的な活用が期待されています。

当日のレシピと試食は、オープンを祝い「お赤飯」と「鯛のアラ汁」。スタッフの同大生3年生・大城綾香さんは「多くの人が来てくれて、やる気が出ます。レシピなど食の情報をもっと発信したい」と抱負を語ってくれました。

また、同ショップを訪れた鎌田節子さん(70歳・菅原町)は「食の大切さをこれからの世代に伝えるのは、とても必要なことだと思います。次は、子どもや孫たちと一緒に来たいです」と話してくれました。

\*食育ショップに関する問い合わせは、埼玉川越総合地方卸売市場 240-2246